



# Keirin

[読者投稿]

## 上海カヌー倶楽部、桂林を下る。

中国の川といえば、誰もが思い浮かべるのが「水墨画の景色」桂林。一昨年結成された上海カヌー倶楽部のメンバーにとっても、この川を下るのは夢だった。必要とされたのは、カヌーの技術より交渉力。政府や観光局などとの交渉を経て、桂林の川下りが実現した。



「360度広がる水墨画の風景のなかを、水牛に見守られながらカヌーがゆつくりと下っていく」。そんな風景を夢に描いて2006年に結成した上海カヌー倶楽部のメンバーは、まさにその夢の中にいました。大型観光船では見られない、目の前に迫る水墨画の景色、観光地化されていない支流のため、途中で出会った人の数より多い水牛の数、水質汚染がはなはだし中国で初めて見た澄んだ水。すべてが予想以上の出来事でした。

「上海カヌー倶楽部」は2006年夏に「中国でカヌーを広めたい」という田島史郎さんを中心として、在上海の日本人のメンバーにて発足しました。「中国」にて「アウトドア」の概念がないなか、悪戦苦闘しながら活動をしています。

メインの活動のカヌーは上海近郊の湖にカナディアンを数艇デポし、あとは中国全国を遠征するのが基本ですが、中国の山・川・海はすべて政府の管理下にあるため、活動のひとつひとつに現地政府や観光局、管理団体との交渉が必要となり、カヌー技術よりも「交渉力」が必要となる特殊な環境下です。幸い、メンバーは企業の海外赴任者が多く、中国人との交渉は日々の仕事で鍛えており、カヌー倶楽部の活動も日々の仕事の延長のような感じでこなしています。

やはり中国の川という思いつづきの「水墨画の景色」桂林です。設立当初から桂林の川を下ってみたいという思いがメンバー全員のなかにありました。普通の川下りであれば本流の川を大型観光船で、支流のあちこちでは竹筏での観光下りは可能ですが、倶楽部としては「自艇」

で下るとするのが目標でした。

あちこちの旅行代理店に連絡を取りましたが、「自艇では安全保障上無理」との返事が多く、あきらめていたところに、ナベ隊員が社員旅行で行ったときに偶然見つけた現地の小さな代理店が、支流の一部で可能らしいとの情報をもとに、今回の遠征が成功しました。

遠征の日程は皆さん勤め人のため、金曜夜出発の日曜深夜戻りの強行軍。カヌー倶楽部員8名のツアーとなりました。

9月14日(金)の夕方6時に上海国内空港である虹橋空港にメンバーが到着、8時発の東方航空のフライトにチェックイン。ファルトが数艇あるため、重量オーバーが心配だったが、チェックインのスタッフは気にせずボートは無事にチェックイン。無理を承知でチェックインの荷物に忍ばせたイワタニのガスボンベはあえなく没収。「中国の空港だからチェック甘いから大丈夫だよ」と言っていたコンドー隊員。中国の空港もセキュリティは厳重でした(当たり前か……)。

フライトの遅れ・取り消しが当たり前国内線にしては珍しく、定刻通りに出発、そして桂林の空港「桂林两江国際空港」に到着。

桂林に到着後は、今回の旅行の代理店である「青年旅行社」によるバンに搭乗。運転手に荷物の多さにビックリされながらも、8人のメンバーとカヌー一式は市内のホテル「桂林賓館」にチェックイン。腹ごなしと買い出しのために市内を徘徊、ヤカンやカップラーメンはすぐに手に入るが、イワタニのガスボンベはさす



がに中国の田舎には売っておらず、着火材代わりになるものを探していたところ、腹ごなしのために寄った屋台で「火鍋」用の固形燃料を10元ほど(150円)で譲ってもらったことに成功。ホテルに戻ったときはすでに午前様、周りの風景がまったく見えないが、「水墨画」の風景を夢見ながら明日に備えて就寝した。

翌日9月15日(土)、若干曇り気味だが直射日光が厳しくない、カヌーには絶好の天気。桂林市内から車に揺られ、約2時間かけて陽朔へ。桂林の川下りは、一般的には漓江という本流の川を大型観光船で景色を楽しむのが一般的であり、陽朔はその最終ポイント。通常の観光客

は陽朔で下船し、買い物などを楽しむ。陽朔にはバックパッカーも多く、安宿やバーなどがひしめき合っており、東南アジアのバックパッカー街を彷彿とさせます。今回のガイドも、この陽朔でロッキークライミングのショップをもっている。

我々はそこからさらに車で1時間ほど走り、下流に向かった。下流は観光局が管理をしていないので、「自艇」での川下りが可能だそう。悪路を揺られ約1時間、「水墨画」の風景の中に突入し、山が目の前に広がります。

10時に出発地点である「福利(フリー)」に到着。ここでカヌーを組み立てるのですが、牛糞に要注意。組み立てているそばを水牛が横切っています。

ここで今回の船の紹介。

ここが今回の船の紹介。



このレンタルカヤック、自作です。中国でレンタルカヤックがあること自体が驚きですが、自作というのもまた中国的。一応、水には浮かびます。パドルは木製で手作り。The China 的なカヤック。レンタル料は2000元(約3000円)。自艇の持ち込みはガイド料として1人50元(約750円)を支払う。

ガイドとして先ほど紹介したロッキークライミングショップのオーナーが先導してくれるのですが、西洋人のガイドフレンドを連れてきており、先方でいちゃいちゃ、かつ我々は写真を撮りながらゆっくり

行くので、我々の速度に愛想を尽かして漕ぎ出して30分後ぐらいにはすでに見えなくなっていました。ガイドの意味なし。まあ、川幅も大きく、瀬もあまりない川なので迷うことがないのですが……。

漕ぎ出す前に聞いていた距離は約10km、結果的には15kmぐらいあったのではないかと考えられます。川はゆっくりと流れており、水墨画の風景が目の前に迫るダイナミックな景色の連続。こんな景色を我々8人で独占できるとは、幸せでした。

他の観光客もあらず、会うのは川ガキと水牛ばかり。コース的には特徴がないので、川地図を作る必要もなし。川原が多くあるので、休憩ポイントも多く、ゆくり下るのには最適で、キャンプポイントも多く見受けられました。途中には食事ができる村落もあり、ローカルな中華料理とビールも楽しめます。

10時から漕ぎはじめて、途中2回の休憩を挟み、午後4時にゴール地点である「曾益(フリー)」に到着。幸せな半日でした。

夜は陽朔付近の興坪(シンピン)という村で、唯一の日本人経営と思われる「林さん」が経営するゲストハウスの「老寨山旅館」に宿泊。オーナーの林さんは宿の裏にある山「老寨山」の頂上からの景色に魅せられて、ここに宿を経営することになったそうです。昔はけもの道的な登山道しかなかったところに、毎日セメントを運んで頂上まで階段を作られたそう、とにかくすごい方です。

夜は満天の星空。近くに都市や町がないので、地平線の近くまで星が見え、天の川もくっきり、数分おきに流れる流れ星に、隊員全員ため息を漏らしていました。

「次回は桂林の川原で焚き火と満天の星空を肴に酒をのむべし」と早くも次の遠征を心の中に決めました。

翌日9月16日(日)、仕事の都合で先発隊と後発隊に分かれて空港に向かい。2泊3日ながらも「桂林を下った」という満足感に浸った遠征でした。

上海カヌー倶楽部HP  
www.geocities.jp/  
上海カヌー倶楽部ブログ  
//shanghaicanoe.blog6.fc2.com  
老寨山旅館  
shanghaicanoe.blog6.fc2.com/

